

第27回受賞者から「おめでとう」

拓殖大学総長・学長 渡辺利夫氏 (73)



西原正氏の論文の中に鮮やかに浮かび上がるのは、明晰な地政学である。尖閣海域での挑発的行動の背後に、同氏は中国の「琉球要求」、さらには米中海軍リバランスの力学を読み取る。ここで譲歩すれば、次に何が引き起こされるかを論じて日本の対応のありように鋭い警告を発する。オバマ政権のアジア最重視戦略が賢明か否かを問うて、西アジアと南アジアが「バルカン化」する危険性をも想定せよと主張する。米国が中東に再び兵を進める可能性を見据えて、日本が米

対中国 深い地政学的考察

国といかなる共同行動を取りうるかを真剣に考えよという。地政学的な考察が深い。

中曽根康弘氏、大勲位菊花大綬章のこの大いなる政治家の業績について、私がここで何かを語る必要はあるまい。中曽根氏の胸中を充満させているのは、国家の基軸たる憲法、外交・安全保障のことである。その実現の場が政治であることを身をもって示した崇き存在が中曽根氏である。氏は「日本の共同体」という表現を好んで用い、日本が歴史的、伝統的、文化的な存在たるを憲法に明記すべしと論じて倦むことがない。現下のいかにも卑小な政局の争いをみるにつけ、中曽根氏をもって日本の政治家の時代は終わってしまったのか、の感を深くせざるをえない。